The Japan Association of College English Teachers (JACET)

大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要
JACET-CSCRB 2005, Vol. 2, pp. 91-110.

日本人英語学習者による非対格動詞と非能格動詞の習得

山川健一（安田女子大学）・杉野直樹（立命館大学）・木村真治（関西学院大学）
中野美知子（早稲田大学）・大場浩正（上越教育大学）・清水裕子（立命館大学）

Abstract The purpose of the present paper is (1) to confirm the validity of the results obtained by Yamakawa et al. (2003) by administering a grammatical proficiency test and a grammatical judgment test to 309 participants, and (2) to present a model of the acquisitions of unaccusative/unergative verbs by Japanese EFL learners based on those findings. The model presented implies that three stages are involved in the acquisitions of unaccusative/unergative verbs.

1．はじめに

本論の目的は，1）日本人英語学習者の非対格動詞と非能格動詞の習得について，Yamakawa et al.（2003）で観察された実験結果の妥当性を確認するために追実験を行い，2）その結果を基に，非対格動詞と非能格動詞の習得モデルを提示することである。次の第 2 節では，実験に至る理論的背景について説明する。第 3 節では，Yamakawa et al.（2003）を概観し，第 4 節で今回の研究で得られた実験結果を報告し，Yamakawa et al.（2003）と比較する。そして第 5 節では，2 つの実験結果について，どのような解釈を加えれば，非対格動詞と非能格動詞の習得プロセスを適切に説明できるのかについて，Oshita（2001）を批判的に検討しながら論じる。

2．理論的背景　－　非対格動詞と非能格動詞

第二言語習得研究において，英語学習者が産出した，自動詞を用いた受動態の誤りについて，以下のような例が報告されている。

(1) *...the most important trouble was happened. (Oshita, 2000: 312)

(2) *Most of people are fallen in love and marry with somebody. (Zobl, 1989: 204)

また，文法性判断テストにおいてもこの種の非文を容認したり，また逆に正しい自動詞文

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

を非文と判断する例が報告されている（e.g., Yip, 1995）。

この種の誤りは，英語のどの自動詞にも生じるわけではなく，非対格動詞と呼ばれる自動詞においてしばしば観察される誤りである。ここではまず，非対格動詞と非能格動詞の違いについて概観し，次に (1) や (2) のような誤りが生じた原因の分析について検討する。

Perlmutter (1978) は，自動詞を非対格動詞（unaccusative verbs）と非能格動詞（unergative verbs）に分類した最初の研究である。関係文法（Relational Grammar）の枠組みの中で行われたこの研究によると，非対格動詞に関しては，①形容詞・状態動詞，②対象物（theme）や被動者（patient）を主語に取る動詞（burn, fall, drop, sink など），③存在・出現を表わす動詞（appear, happen, exist, disappear など），④五感に作用する非意図的な現象を表わす動詞（shine, sparkle, smell など）や⑤アスペクト動詞（start, begin, stop など）が属するとし，非能格動詞に関しては，①意図的・意志的行為を行う動詞（work, play, speak, smile など）や生理的現象を表わす動詞（cough, sneeze, hiccough など）が属するとしている。そして，非能格動詞の主語は最初から主語であるのに対し，非対格動詞の主語はもともとは目的語であり，後の段階で主語になると分析されている。

生成文法（GB 理論）の枠組みでは，非能格動詞の主語（動作主（agent）の意味役割を持つ）は，(3) のようにD構造とS構造で主語（外項：external argument）の位置にあるのに対し，非対格動詞の主語（対象物（theme）の意味役割を持つ）は，(4) のようにD構造では目的語（内項：internal argument）の位置にあり，S構造で主語の位置に移動すると考えられている。よって，表層的には非能格動詞と非対格動詞はどちらも「NP＋V」の構造を持ち，その統語的相違を指摘するのは難しくなっている。

(3) Mary danced.

非能格動詞 [NP [$_{VP}$ V]] : [Mary [$_{VP}$ danced]]

(4) The door opened.

非対格動詞 [*e* [$_{VP}$ V NP]] : [*e* [$_{VP}$ opened the door]]

(5) The boy opened the door.

他動詞 [NP [$_{VP}$ V NP]] : [The boy [$_{VP}$ opened the door]]

このように，非対格動詞の主語がもともとの統語構造では内項として規定されているという仮定は「非対格性の仮説（Unaccusative Hypothesis）」と呼ばれる（注1）。

第二言語習得研究においては，これまで概観してきたような非対格動詞と非能格動詞の区別に関して，学習者がどのように理解しているかについて一連の研究が進められてきた

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

(Sorace, 1993, 1997; Yip, 1994, 1995; Hirakawa, 1995, 1997, 2003; Shomura, 1996; Balcom, 1997; Yuan, 1999; Ju, 2000; Oshita, 2000, 2001; Yusa, 2003)。その中で，先駆的な研究として Zobl (1989) があり，この研究では，異なる L1 の英語学習者の英作文における非対格動詞の誤りについて，GB 理論の枠組みから詳細な分析が行なわれた。これによると，学習者は非能格動詞よりも非対格動詞において (1) や (2) のような誤りを多く犯していることが発見された。この誤りの原因について，Zobl (1989) では，D 構造において受動文と非対格動詞の文は類似の構造を持つためであると説明されている。

(6) English is spoken in many countries.

受動文： [*e* [$_{VP}$ be spoken English]]

(7) The accident happened 15 years ago.

非対格動詞： [*e* [$_{VP}$ happen the accident]]

(8) *The accident was happened 15 years ago.

(6) と(7) のどちらにおいても，theme の意味役割を担う NP が D 構造では内項の位置にあり，S 構造が派生される際に外項位置（主語位置）に移動する。Zobl (1989) は，学習者は D 構造における受動文と非対格動詞の文とのこの類似性に気づき，受動文の動詞の形態的特徴（be+p.p.）を過剰般化して，非対格動詞の内項が主語位置へ移動するという現象と結びつけてしまい，(8) のような非文を産出すると説明した。このように，非対格動詞の内項位置にある NP が外項位置に移動する際に，自動詞を受動化した誤りが生じてしまうという仮説は，「NP 移動説（NP movement account)」と呼ばれている。

一方，(8) のような誤りの原因を説明する仮説として「語彙使役化説（causativization account)」がある（e.g., Yip, 1995; Ju, 2000)。これによると，(8) のような非文は，(9) のように，学習者が使役主（例えば the driver のようなもの）を勝手に創造し，自動詞を他動詞化したものが前提にあると仮定する。そして，この誤った他動詞文に通常の受動態生成規則を適用して，結果的に (8) のような非対格動詞を受動化した非文を産出することになる。

(9) *The driver happened the accident 15 years ago.

Oshita (2000) では，ロングマン学習者コーパス（Longman Learners' Corpus）を利用してこれら 2 つの仮説を検証し，NP 移動説の方が先行研究のデータを適切に説明できると結論づけている。さらに, Oshita (2001) では「非対格性わな仮説 (Unaccusative Trap Hypothesis)（以下，UTH)」を提唱し，非対格動詞の縦断的習得段階について 3 つの段階に分けて説

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

明を加えている。

(10) *[the accident [$_{VP}$ happened]] → The accident happened 15 years ago.

(11) [*e* [$_{VP}$ happened the accident]] → *The accident was happened 15 years ago.

(12) [*e* [$_{VP}$ happened the accident]] → The accident happened 15 years ago.

これによると，学習者は習得の第一段階 (10) では，非対格動詞と非能格動詞の区別をしておらず，非対格動詞の場合にも非能格動詞と同じD構造を想定し，内項にあるはずの名詞句（the accident）が外項の位置にあり，誤ったD構造の表象となっている。そして，これがS構造になる際は表面的には文法的な非対格動詞の文が産出されることになる。次の第二段階 (11) になると，学習者は非対格動詞の正しいD構造を表象するようになる。そしてこの段階になって非対格動詞の文のD構造と受動文のD構造との類似性に気づき始め，D構造からS構造になる時に誤った受動化規則を適用して非文を産出する。これはすなわちNP移動説を支持した考え方になっている。最後の第三段階 (12) になると，D構造においてもS構造においても非対格動詞の正しい表象構造を持つことになる。以上見てきたように，非対格動詞を受動化した文を産出したり容認したりする現象や，また非対格動詞の正しい自動詞用法を拒否する現象は中級レベルで表出し，非対格動詞の習得状況は全体としてU字曲線（U-shaped curve）を描くとされている。

しかしながら，UTHが依拠している先行研究においては，被験者の英語能力レベルは各研究で異なる基準で測定されていたり，主観的な判断であったりしているので，これらを基に非対格動詞の発達段階を予測するのは大いに疑問が残る。よって，Yamakawa et al.（2003）では，これらの点も含めて日本人英語学習者の非対格動詞の習得状況について調査を行った。次節では，この研究について概観する。

3. Yamakawa et al. (2003)

この研究に先立って行われた清水（他）(2003) においては，英語能力測定のための既存の標準テスト（CELT, Oxford Placement Test, TOEIC）の妥当性と信頼性を検証し，これらのテストを基に英文法能力の新しい測定尺度の作成が行われた。これは「英語文法能力テスト（Measure of English Grammar：以下，MEG)」と呼ばれる。MEGは110項目から成り，これらの項目は，①項目難易度が0.30以上で0.80以下，②点双列相関係数が0.20以上のいずれかを満たしている。また，MEGのKR-20信頼性係数は0.917で，Spearman Brown信頼性係数が0.926となっており高い信頼性を持っている。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

Yamakawa et al.（2003）では大学生の日本人英語学習者 113 名を対象に上記の MEG を実施した(M=72.39, SD=18.25, score range 22-104)。その中から上位群(M=94.10, SD=6.06, score range 86-104)，中位群（M=73.00, SD=3.72, score range 68-79)，下位群（M=48.28, SD=11.19, score range 22-63）を 29 名ずつ抽出した。これら 3 つのグループは統計的に有意な差があった（$F(2, 84)=260.475$, $p<0.001$)。次に，これらの調査対象者に非対格動詞と非能格動詞に関する文法性判断テスト（Unit Y）を与え，約 15 分程度で解答させた。Unit Y は 40 問から構成され，5 段階（−2：完全に不可能，−1：多分不可能，0：わからない，1：多分可能，2：完全に可能）で各テスト項目の文法性判断を行うものである。集計時には調査対象者の判断と正解との「距離」によって得点化した。例えば，適格文を「2」と判断すれば 4 点が与えられ，−2 と判断すれば 0 点が与えられる。非文の場合はこれと逆で，「2」には 0 点で，「−2」には 4 点が与えられた。Unit Y には，6 つの非対格動詞 (appear, arrive, die, exist, fall, happen）と 4 つの非能格動詞（cry, dance, laugh, work）の計 10 の動詞が，「適格文（NP＋V)」「非文の受動文（*NP＋be＋p.p.)」「非文の他動詞文（*NP＋V＋NP)」の 3 つの構造の中で用いられ，全部で 30 のテスト項目（カテゴリ A−F）となり，これに錯乱肢（フィラー）が 10 項目（5 つの動詞を用いて適格文の他動詞文 5 問と適格文の受動文 5 問）加わり，全部で 40 項目となっている（表 1）。

表 1．Unit Y におけるテスト項目の例

category	verb	construction	example
A	unaccusative	NP+V	Your letter arrived yesterday.
B	unergative		Her father cried at her wedding ceremony.
C	unaccusative	*NP+be+p.p.	*Because of the rain, the train was arrived late.
D	unergative		*He was cried when he heard of his mother's death.
E	unaccusative	*NP+V+NP	*Finally the waitress arrived the salad to us.
F	unergative		*The boy hit his little sister and cried her.

この研究では先行研究を踏まえ，①非対格動詞は非能格動詞よりも文法性判断テストの得点が有意に低いかどうか，②非対格動詞の習得は U 字曲線を描くのか，③非対格動詞を受動化する誤りの原因は，NP 移動説と語彙使役化説のどちらがより妥当か，の 3 つの疑

NII-Electronic Library Service

問に答えることを目的とした。具体的には，①に関しては，非対格動詞のカテゴリである A，C，E の得点平均と非能格動詞のカテゴリである B，D，F の得点平均を比較する。②に関しては，非対格動詞のカテゴリである A, C, E の得点平均に関して，上位群，中位群，下位群を比較し，中位群が上位群と下位群より有意に得点平均が低いか，つまり U 字曲線を描いているかどうかを検証する。③に関しては，カテゴリ C とカテゴリ E の得点が他のカテゴリの得点よりも有意に低い場合は，学習者は存在しない使役主を想定してそれを受動化している可能性が高くなり，語彙使役化説を支持することになる((8) と (9) を参照)。一方，カテゴリ C の得点がカテゴリ E の得点よりも有意に低い場合は，学習者は存在しない使役主を想定しているというよりも，受動文からの類推から，非対格動詞の内項が主語位置に移動する際に受動化規則を誤って適用していると仮定することができ，NP 移動説を支持することになる（(7) と (8) を参照)。

2 要因の分散分析（英語文法能力と動詞の種類）の結果，図 1 が示すように，非対格動詞の方が非能格動詞よりも文法性判断テストの得点が有意に低かった（$F(1, 84)=8.715$, $p<0.005$)。よって，①に関しては，非対格動詞の方が困難度が高いと言える。次に②についてであるが，図 2 が示すように学習者（N=113）の英語文法能力と非対格動詞の文法性判断テストの得点には中程度の有意な相関があり（$r=0.477$; N=113; $p<0.01$)，また図 1 においても，非対格動詞の得点平均に関して，上位群，中位群，下位群の間にはすべて有意な差が見られた（$F(2, 84)=19.585$, $p<0.0001$)。これらのことから，Oshita (2001) で主張されているような U 字曲線は見られないということになり，学習者の非対格動詞の習得は英語文法能力と正比例するということになる。

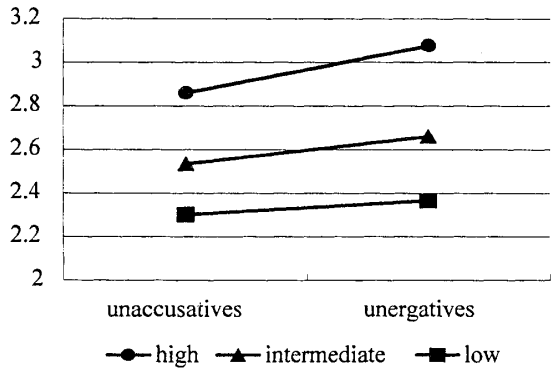

図 1．非対格動詞（カテゴリ A・C・E）と非能格動詞（カテゴリ B・D・F）の得点平均

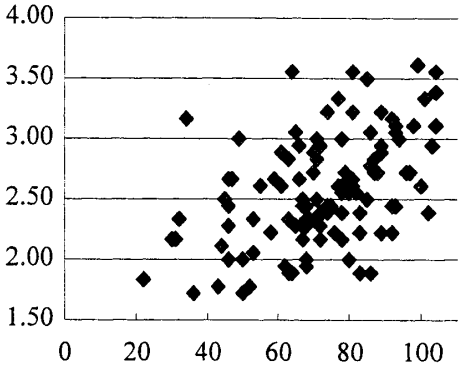

図 2．MEG と非対格動詞（カテゴリ A・C・E）の得点平均との相関

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

次に，③についてであるが，図3が示すように，多重比較（Fisher's PLSD 法）の結果，カテゴリ C は他のすべてのカテゴリと有意差があり，NP 移動説を支持する結果となった。しかしながら，下位群においては，カテゴリ C と E に有意差があるものの，カテゴリ E の得点平均は概して高くなく，語彙使役化の可能性を全く否定することはできないと思われる。また，非能格動詞についても，下位群のカテゴリ D と F の得点平均の低さを考慮すると，ここにおいても語彙使役化が生じていると考えることができる。

次にカテゴリ A－F の習得順序であるが，カテゴリ C と他のすべてのカテゴリ間で有意差が見られた以外は，特筆すべき有意差のある箇所は見られなかったが，学習者は総じて，適格文（カテゴリ A と B）から習得が進み，次に自動詞を他動詞構文で使用した非文（カテゴリ E と F）を正確に非文と判断できるようになる。しかしながら，非対格動詞を受動文で用いた非文（カテゴリ C）に関しては，上位群においてでさえ他のカテゴリと比較して習得が最も遅くなっているという特徴が観察された。

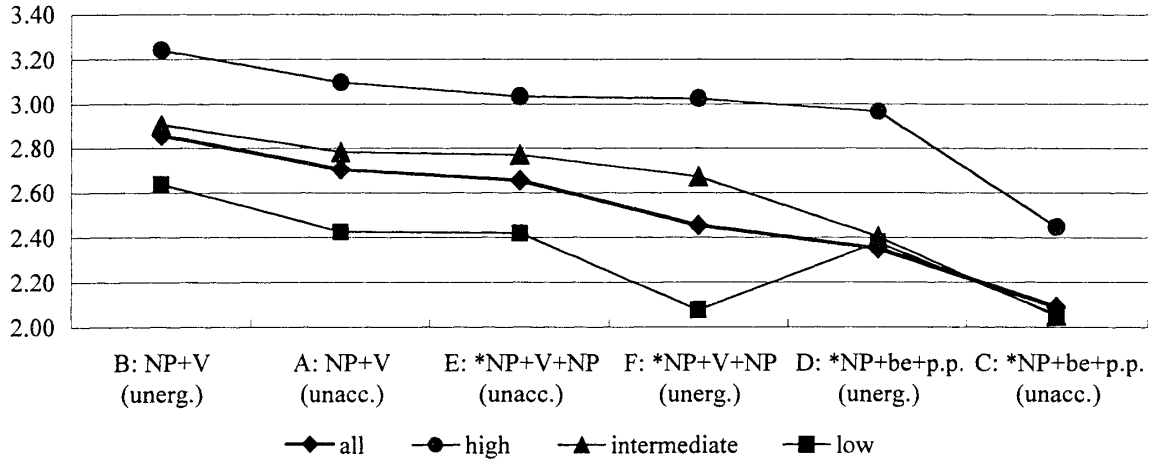

図３．文法性判断テスト得点のカテゴリ間の比較

以上をまとめると，Yamakawa et al.（2003）では，非能格動詞よりも非対格動詞の方が学習者にとって困難度が高く，非対格動詞は英語文法能力の上昇とともに習得が進んでいくことがわかり，また，非対格動詞を受動文で用いる誤りについては，下位群を除いては，NP 移動説による説明の方が語彙使役化説よりも妥当性があることが判明した。

４．調査

4.1　調査目的

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

今回の調査では，前回の調査である Yamakawa et al.（2003）で見られた結果がどのくらい妥当性を持つものなのかを検証する。前回の結果から本調査へ以下の 4 つの仮説が導き出された。

①非対格動詞の方が非能格動詞よりも困難度が高い。

②非対格動詞の習得は全般的な英語文法能力に比例し，U 字曲線は描かない。

③非対格動詞を受動文で用いる非文の原因として，NP 移動説の方が語彙使役化説よりも妥当性がある。

④非対格動詞と非能格動詞の習得順序に関しては一定の傾向がある。

4.2 調査方法

調査は 6 つの大学から合計 309 名の日本人英語学習者に対して行われた。これらの調査対象者に前回の調査で用いられた MEG と Unit Y を別々の日程で与えた。解答時間はそれぞれ 60 分と 20 分であった。そして，この 309 名の中から，上位群（M=97.20, SD=2.49, score range 102-94），中位群（M=71.13, SD=1.28, score range 73-69），下位群（M=49.633, SD=2.47, score range 54-45）をそれぞれ 30 名抽出した。これら 3 つのグループは統計的に有意な差がある（$F(2, 87)=3532.339$, $p<0.000$)。Unit Y に関しては，各カテゴリの問題数を統一するという目的で前回の 40 問から 48 問に問題数を増加した（以下の例で下線部のある動詞)。これによって，6 つの非対格動詞（appear, arrive, die, exist, fall, happen）と 6 つの非能格動詞（cry, dance, laugh, play, sing, work）の計 12 の動詞が，「適格文（NP＋V)」「非文の受動文（*NP＋be＋p.p.)」「非文の他動詞文（*NP＋V＋NP)」の 3 つの構造の中で用いられ，全部で 36 問(カテゴリ A－F)となっている。これに錯乱肢として 6 つの動詞(break, burn, close, dry, grow, melt）が 12 問（適格文の他動詞文 6 問と適格文の受動文 6 問）加わり，全部で 48 問となっている。この文法性判断テストは前回と同じく 5 段階（今回は 1 から 5 の数字を用いた）で判断され，正解からの「距離」で解答に得点が与えられた。

4.3 調査結果

まず前述した仮説①についてであるが，２要因（英語文法能力と動詞の種類）の分散分析の結果，非対格動詞（カテゴリ A，C，E）の得点平均は非能格動詞の得点平均（カテゴリ B，D，F）よりも有意に低かった（$F(1, 87)=26.612$, $p<0.000$：図 4)。このことから前回の調査同様，非対格動詞の方が学習者にとって困難度が高いことが確認された。このこと

NII-Electronic Library Service

は，非対格動詞と非能格動詞では習得状況が異なるということを意味し，英語の「自動詞」の習得という単一のカテゴリでは習得状況を的確に捉えられないということを意味している。

次に，仮説②についてであるが，同じく図 4 において，3 つのグループは統計的に有意差があった。多重比較（Ryan 法）の結果，中位群と下位群の間には有意差は見られなかったが，非対格動詞の習得状況については概して学習者の英文法能力と正比例の関係にあった。また，図 5 が示すように，学習者（N=309）の英語能力と非対格動詞の得点平均の間には，弱い有意な相関が見られた（r=0.298; N=309; p<0.01）。これらのことから，非対格動詞の習得においては，Oshita (2001) の唱えるような U 字曲線は前回の調査と同様に存在しないと言える。

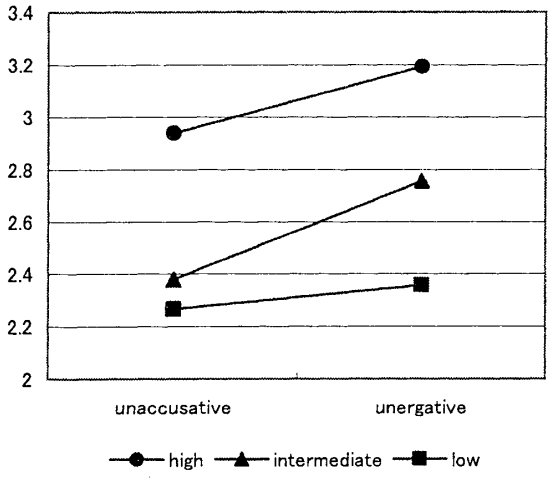

図４．非対格動詞（カテゴリ **A・C・E**）と非能格動詞（カテゴリ **B・D・F**）の得点平均

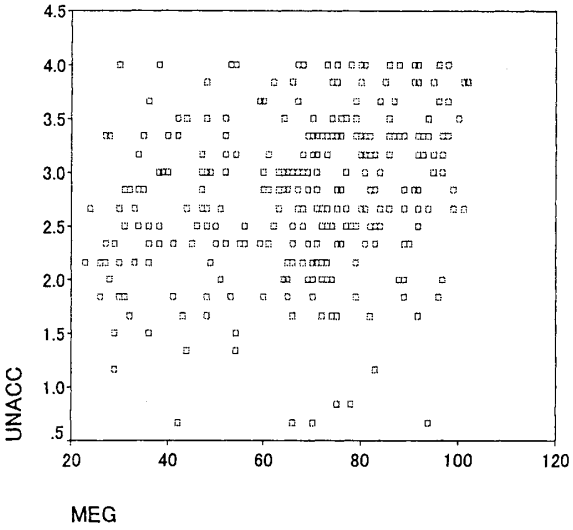

図５．**MEG** と非対格動詞（カテゴリ **A・C・E**）の得点平均との相関

次に仮説③について見てみる。2 要因（英語文法能力と文構造のカテゴリ）の分散分析を行った結果，2 つの要因の主効果は有意であったが，交互作用も有意であったため（F(10, 435)=4.189, p<0.000），英語文法能力要因のそれぞれの水準（上・中・下）における文構造カテゴリ要因の単純主効果を分析し，多重比較（Ryan 法）を行った。その結果，非対格動詞のカテゴリ C と E の間には，中位群と下位群において有意な差が見られたが，上位群においては，差が見られなかった（図 6）。このことから，中位群と下位群においては，NP 移動説を支持する結果が生じたと言える。しかしながら，前回の調査と同様に，下位群のカテゴリ E は得点平均はそれほど高いとは言えない。つまり，カテゴリ C と有意差はある

NII-Electronic Library Service

が，カテゴリＥも多くの被験者が誤って容認している，または「わからない」と答えていることになる。すなわち，下位群においては，語彙使役化説の可能性も完全に却下することはできないと言える。一方，上位群においては，有意差は見られなかったが，これは語彙使役化説をすぐに支持するものではない。上位群では既に，カテゴリＣとＥについて，ほぼ正しい判断をしていることになるので，語彙使役化がここで生じているとは考えにくい。一方，非能格動詞について見てみると，下位群のカテゴリＤとＦの得点平均の低さを考慮すると，前回の調査と同様に，ここにおいても語彙使役化が生じていると考えることができる

次に仮説④について検討する。仮説③の分析において交互作用が見られた通り，各群間でカテゴリ Ａ－Ｆ の正答平均の順位に多少のばらつきがあるが，図６が示すように，全体的には前回と同様に，学習者はまず非対格・非能格動詞の適格文（カテゴリ Ａ・Ｂ）を正しいと判断できるようになり，次にそれらの動詞を他動詞構文で用いたもの（カテゴリＥ・Ｆ）が非文であると判断できるようになり，最後に受動構文で用いたもの（カテゴリＣ・Ｄ）を非文と判断できるようになると言える。

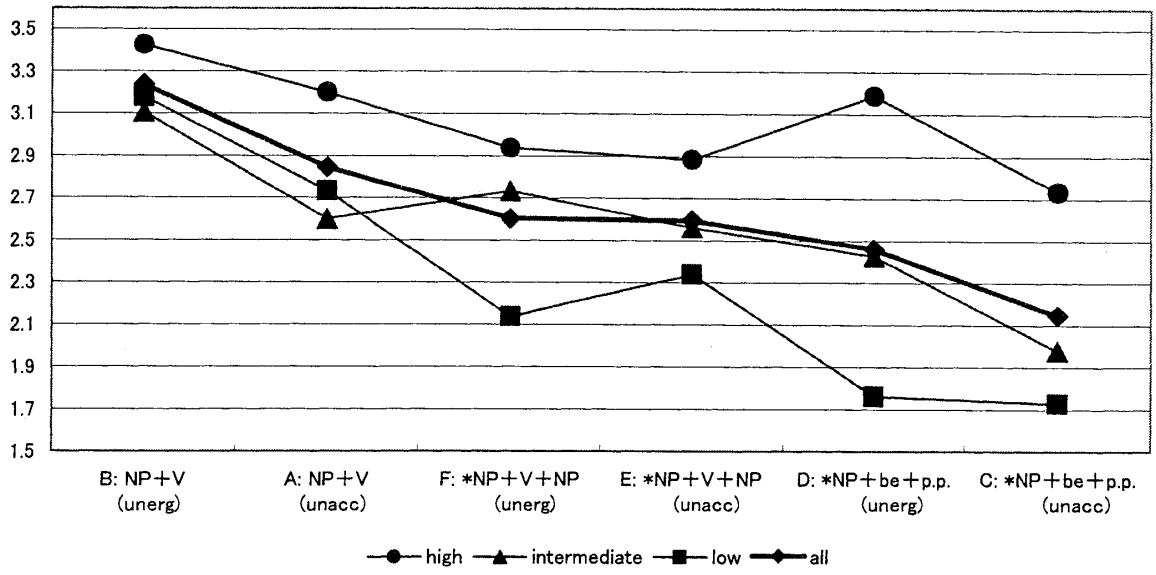

図６．文法性判断テスト得点のカテゴリ間の比較

以上を要約すると，非対格動詞は非能格動詞よりも習得が困難であり（仮説①），非対格動詞の習得においては Ｕ 字曲線は観察されず（仮説②），英語文法能力の発達と正比例の関係にあった。また文構造のカテゴリごとに見ると，カテゴリＢは最も得点平均が高く，

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

カテゴリCが最も低かった。適格文から非文へと非対格・非能格動詞の習得は進んでいる傾向があるといえる（仮説④）。また，非対格動詞を受動文で用いる誤りに関して，下位群と中位群についてはNP移動説を支持するような結果が見られた（仮説③）。しかしながら，語彙使役化説の可能性も，特に下位群においては排除できないことが分かった。

5．非対格動詞と非能格動詞の習得モデル

5.1 Oshita (2001) の再考察

第2節で概観したように，Oshita (2001) のUTHにおいては，非対格動詞の習得は，U字曲線を描くと主張された。ここでは，第3節と第4節の調査結果を受けて，UTHについてさらに詳細に考察を加えていく。(13) で示されるように，UTHの発達曲線の第1段階においては，非対格動詞の語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure）（注2）は正しく表象されているが，項構造への結びつけ規則（Linking Rules）が間違っているために，項yが外項 (y) として表示され，結果的に間違った項構造（そしてD構造）の表象を持つとされる。項構造とD構造に関しては，非対格動詞は非能格動詞と同じ表象を持つと仮定されているので，D構造からS構造を派生する時はNP移動は起こらない。

(13) 非対格動詞習得の第1段階（動詞 fall を例にとって）

語彙概念構造： [y FALL] (target)

↓ ←結びつけ規則（non-target）

項構造： (y)

D構造： [y [$_{VP}$ FALL]] （non-target）

↓

S構造： Y falls. （non-target であるが表面上は適格文）

次に，(14) で示されている第2段階では，語彙概念構造から項構造とD構造への結びつけ規則は正しいものになり，項yは内項 <y> として表示されるようになる。しかしながら，この段階において，学習者は非対格動詞と受動文の統語的類似性（D構造においてyが内項にあり，S構造で外項に移動するというもの）に気づき始め，S構造を派生する時に非対格動詞の場合にも，動詞を be + p.p. にしてしまうという誤りを犯し始める。

(14) 第2段階

語彙概念構造： [y FALL] （target）

↓ ←結びつけ規則（target）

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

項構造： <y>

D 構造： [*e* [$_{VP}$ FALL　y]] (target)

↓　←NP movement (non-target)

S 構造： Y is fallen. (non-target)

最後に (15) で示されている第 3 段階では，学習者は，S 構造を派生する際，be＋p.p. を伴わない正しい NP 移動を生じるようになり，正しい S 構造が表出されるようになる。

(15)　第 3 段階

語彙概念構造： [y FALL] (target)

↓　←結びつけ規則 (target)

項構造： <y>

D 構造： [*e* [$_{VP}$ FALL　y]] (target)

↓　←NP movement (target)

S 構造： Y falls. (target)

この 3 段階を仮定することによって，Oshita (2001) は，先行研究で非対格動詞を受動文で用いた誤りが，中・上級者以上にしばしば観察されたという事実を説明できるとしている。Oshita (2001) で特徴的なことは，どの段階においても，始発である語彙概念構造は正しい表象を仮定しているということである。このことは，非対格動詞を受動化した誤りの原因は，語彙使役化説ではなくて NP 移動説であると仮定していると同義に解釈できる。なぜならば，次節で論じるように，語彙使役化は語彙概念構造で生じる現象であるからである。そして，Oshita (2001) は，誤りを生じさせるのは，各表象間をつなげる結びつけ規則（第 1 段階）または NP 移動規則（第 2 段階）が原因であるとしている。

しかしながら，Yamakawa et al. (2003) の調査と今回の調査では，Oshita (2001) の UTH を支持する結果は観察されなかった。すなわち，以下の 3 点が反証例となった。

①非対格動詞の習得は U 字曲線を描かずに，英語文法能力に比例している。

②全般的に NP 移動説を支持する現象が見られたが，下位群においては，語彙使役化を裏付けるような現象も観察された。

③非能格動詞の習得に関しても，特に下位群においては困難を感じている。

③の非能格動詞の習得に関しては，先行研究においてはあまり焦点が当てられておらず，むしろ，Oshita (2001) のように，非能格動詞の習得は，非対格動詞と比較すると問題なく行われていると仮定されている場合が多い。しかしながら，下位群においては，非能格動

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

詞を「*NP + be + p.p.」や「*NP + V + NP」の構文で用いた問題の得点が低かったことが，前回と今回の調査から明らかになった。よって，前回と今回の調査結果を反映させた，非対格動詞の習得のモデルならびに非能格動詞の習得のモデルについて，それぞれ 5.3 と 5.4 で提示を試みる。

5.2 NP 移動と語彙使役化

Oshita (2001) を含めた先行研究においては，非対格動詞を用いた受動文の誤りの原因に関して，NP 移動説か語彙使役化説かという二者択一の立場を取っており，それらのどちらが妥当性があるかについて，データを基に分析が行われている。しかしながら，NP 移動も語彙使役化も，同一の学習者内の異なる発達段階で両方が生じていると仮定することもできるし，また同一の学習者がある動詞に対しては NP 移動を行い，別の動詞に関しては語彙使役化を行っていると仮定することもできるのではなかろうか。なぜならば，NP 移動は D 構造から S 構造に派生される際に生じる現象である一方で，語彙使役化は，D 構造が派生される前の段階の語彙概念構造で生じる現象であるからである。すなわち，NP 移動は (16) が示すように，D 構造において内項にある名詞句 (NP_i) が外項位置に移動する際，受動文生成の類推から，動詞を be＋p.p. にしてしまうものである。一方，語彙使役化は語彙概念構造において，もともとは (17) のような非対格動詞の語彙概念構造に対して，(18) の下線部のような存在しない使役主を付加して生成されるものである。

(16) （D 構造）[e [$_{VP}$ V NP_i]] → （S 構造）*[NP_i [$_{VP}$ be＋p.p. t_i]]

(17) [y BECOME [y BE at z]]

(18) [x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

そして (18) から，他動詞に通常適用される結びつけ規則によって D 構造が派生され，次にそれが受動化されて非対格動詞を受動化した誤りが生成されることになる。よって，NP 移動は統語レベルで生じる現象であり，語彙使役化は語彙概念構造レベルで生じる現象であると言える。また，別の言い方をするなら，NP 移動は表象間の段階で起きる現象である一方で，語彙使役化は表象内で起きる現象である。このことを考慮すると，非対格動詞のすべての誤りを，NP 移動と語彙使役化のどちらかの現象に起因させる必然性はないことになってしまう。以下，この推論と我々の実験データに基づいて，日本人英語学習者による非対格動詞と非能格動詞の習得モデルを提示することにする。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

5.3 非対格動詞の習得モデル

ここで提示される非対格動詞の習得モデルは3つの習得段階からなる。第一段階では，学習者は非対格動詞を，break，burn，melt のような能格動詞（ergative verbs）と見なしており，他動詞でも自動詞でも用いることができると認識している段階である。よって，非対格動詞については，他動詞と自動詞の2つの場合それぞれに対して、(19) のような2つの語彙概念構造を持っていると仮定する（注3）。

(19) a. 自動詞の場合： [y BECOME [y BE at z]]

b. 他動詞の場合： *[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

よって，(19a) が正しく D 構造と S 構造に派生された場合，Unit Y のカテゴリ A（例，20a）が正解となり，また、(19a) が正しく D 構造に派生されても S 構造への派生の際に誤った NP 移動が生じればカテゴリ C（例，20b）が不正解となる。また，誤った語彙概念構造である (19b) から，能格動詞（他動詞の場合）の結びつけ規則によって D 構造が派生され，次に S 構造が派生されると，カテゴリ E（例，20c）が不正解となる。そして、このカテゴリ E を受動化してカテゴリ C が不正解になる可能性も考えられる。

(20) a. カテゴリ A： Your letter arrived yesterday.

b. カテゴリ C： *Because of the rain, the train was arrived late.

c. カテゴリ E： *Finally the waitress arrived the salad to us.

よって，カテゴリ C の誤りは，NP 移動による場合もあり得るし，語彙使役化による場合もあり得ることになる。このように仮定することによって，下位群において特にカテゴリ C の平均点が低いことや，カテゴリ E に関しても平均点が相対的に低いことが説明できる。また，(19a) の正しい語彙概念構造から，正しい S 構造を導く（すなわちカテゴリ A を適格文と判断できる）こともあれば，(19a) から be＋p.p. を伴う誤った NP 移動によって S 構造を導く（すなわちカテゴリ C を適格文と判断してしまう）こともある。ということは，この段階における規則はかなり不安定で変異性を持つ状態にあるということができる。

次に，第二段階であるが，ここでは，学習者は (19b) のような語彙概念構造を廃棄し，結果として語彙使役化による誤りが減少してくる段階である。すなわち，学習者は非対格動詞が能格動詞ではなく，自動詞用法しかないということに気づいてくる段階である。この段階になると，カテゴリ E を容認してしまう誤りが減少し，カテゴリ C の語彙使役化による誤答が減少してくると考えられる。

最後に第三段階であるが，ここでは非対格動詞の正しい語彙概念構造（19a）の表象が定

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

着してくる。よって，この段階ではカテゴリ A とカテゴリ E の正答の平均点が安定してくる。しかしながら統語レベルでは，上級者でも時折誤った NP 移動が生じてしまい，カテゴリ C の誤答が生じてしまう原因となっていると考えられる。

以上見てきたように，非対格動詞の 3 つの習得段階を仮定したが，これらは分離した不連続の 3 つの段階ではなく，連続的で，ある現象が生じる割合が段階的に増加する（または減少する）というものである。NP 移動と語彙使役化は最初の段階から生じており，語彙使役化の方が NP 移動よりも先に段階的に減少するというものである。このように異なるレベルで生じる 2 つの現象（NP 移動と語彙使役化）を仮定することによって，前回と今回で得られたデータをより包括的に説明することができる。

5.4 非能格動詞の習得モデル

前述したように，非能格動詞の習得については，先行研究ではあまり焦点が当てられてこなかった。その背景には，非能格動詞の習得は非対格動詞と比較して困難なものではないと仮定されていると考えられる。しかしながら，我々の一連の研究から，特に下位群においては非能格動詞のカテゴリ D や F の得点平均が低いことが判明した。これらの事実を踏まえて，非対格動詞と同様に，3 つの段階からなる非能格動詞の習得モデルの提示を試みる。

まず第一段階では，学習者は非能格動詞を自動詞でも他動詞でも用い，(21) のようにそれぞれに対応する 2 つの語彙概念構造を持っていると考えられる。一つは正しい非能格動詞の語彙概念構造 (21a) であり，これによって，カテゴリ B (22a) を適格文と判断できることになる。もう一つは，非能格動詞を使役化させたようなものであり (21b)，本論ではこれを「合成的使役構造」と呼ぶことにする。本来ならこの語彙概念構造は，単一の動詞で表わすことはできず，例えば (22c) の内容を表現する場合，(23) のような迂言的な使役表現で表現しなくてはならない。(21b) の構造によって，非能格動詞を他動詞として用いたカテゴリ F を容認してしまう誤りが生じ，またそれを受動化したカテゴリ D を容認してしまう誤りがこの段階で多数生じることになる。これにより，下位群において，カテゴリ D や F の平均点が低いことが説明できる。

(21) a. [x ACT]

b. *[x ACT (on y)] CAUSE [y ACT].

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

(22) a. カテゴリB： Her father cried at her wedding ceremony.

b. カテゴリD： *He was cried when he heard of his mother's death.

c. カテゴリF： *The boy hit his little sister and cried her.

(23) The boy hit his little sister and made her cry.

次に第二段階では，学習者は非能格動詞は他動詞用法がないということに気づき，誤った (21b) の語彙概念構造を廃棄し始め，合成的使役構造が減少し始める。よって，カテゴリDとカテゴリFを容認してしまう誤答が減少する。前回の調査のカテゴリFと今回の調査のカテゴリDとFにおいては，下位群，中位群，上位群それぞれの間で有意差が見られた一方で，非対格動詞のカテゴリCとEにおいては，上位群と下位群との間でのみ有意差が見られた。このことは，非能格動詞は非対格動詞の場合よりも早い段階で，誤った語彙概念構造（非能格動詞の場合は合成的使役構造で，非対格動詞の場合は能格動詞の他動詞の構造）を廃棄して，正しい自動詞の語彙概念構造のみを保持するようになることを意味する。

最後の第三段階では，正しい語彙概念構造の表象 (21a) が定着してくる。この段階になると，カテゴリB・D・Fの正答率が安定してくると考えられる。

以上見てきたように，これら3つの段階は，非対格動詞の場合と同じく，分離した不連続の3つの段階ではなく連続的で，合成的使役構造が生じる割合が段階的に減少するというものである。しかしながら，非対格動詞の場合との相違点としては，非能格動詞の場合は，第一段階で生じる合成的使役構造の廃棄という語彙概念構造レベルでの調整のみが必要であるのに対して，非対格動詞の場合は，語彙概念構造レベルで生じる語彙使役化の廃棄のみならず，統語レベルで生じるNP移動に対しても正しい調整・習得が必要となる。この点において，非能格動詞よりも非対格動詞の方が習得が困難になると考えられる。

6．結論

本研究は，Yamakawa et al. (2003) で得られた結果の検証と，これと今回新たに行った調査結果を総合して，日本人英語学習者の非対格動詞と非能格動詞の習得モデルを提示するという2つの目的からなる。第一の目的に関しては，Yamakawa et al. (2003) を支持する結果が得られた。すなわち，非対格動詞の方が非能格動詞よりも困難度が高く，またこれらの動詞の習得順序には一定の傾向があることが確認された。加えて，非対格動詞の習得に関しては，Oshita (2001) で唱えられたようなU字曲線は観察されなかった。そして，非対

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

格動詞を受動文で用いる誤りに関しては，概して NP 移動説が支持されたが，下位群においては，語彙使役化説を支持するような結果も観察された。

これらの結果を受けて，第二の目的である非対格動詞と非能格動詞の習得モデルの提示が試みられた。これらはどちらも 3 つの連続的な段階からなるモデルであった。非対格動詞に関しては，最初は能格動詞と見なされる段階があり，自動詞と他動詞の 2 つの語彙概念構造が存在する。ここで，語彙使役化と NP 移動に基づく誤りが生じる。そして語彙使役化による他動詞の語彙概念構造は徐々に廃棄されるが，be＋p.p. を伴う NP 移動による誤りは上級者でも依然として生じるという主張がなされた。非能格動詞に関しては，最初は非能格動詞の正しい語彙概念構造と誤った合成的使役構造の両方を持ち，後者は習得が進むにつれて徐々に廃棄されると仮定された。すなわち，非対格動詞と非能格動詞のいずれの場合にも，最初は複数の語彙概念構造が仮定され，習得が進むにつれて誤った語彙概念構造の方は廃棄されるというものである。

本研究で提示された非対格動詞と非能格動詞の習得モデルは，一定の結論というよりも，前回と今回の調査から導き出された仮説であると解釈した方が良いであろう。今後の課題としては，この仮説を先行研究と比較しながら理論的により精緻化し，実証的に検証していく必要がある。またその際は，調査において用いる動詞を変化させたり，それらの動詞が対応する日本語との関係についても細かく調べていき，文法性判断時における日本語の影響についても詳細に調査していく必要があるであろう。

＊本論文は，平成 16 年 10 月 16 日に開催された 2004 年度第 1 回 JACET 中国四国支部研究会での口頭発表に基づくものである。この発表の準備中に，共同研究者の木村真治が逝去した。ここに謹んでご冥福を祈るとともに，本論文を彼の霊前にささげる。

謝辞

本研究の実施にあたっては，科学研究費助成（基盤研究 B1）（平成 13 年～15 年：課題番号 1348064 と平成 16 年～18 年：課題番号 16320078）を得た。

注

1．ある自動詞が，非対格動詞と非能格動詞のいずれに属するかのテストとして there 構文や結果構文（resultative construction）などが利用されてきた。これらのテストについ

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

ての詳細は，Levin and Rappaport Hovav (1995)，影山（1996），影山（編）（2001），高見，久野（2002）等を参照のこと。

2．語彙概念構造とは，動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造である。語彙概念構造から結びつけ規則により項構造が派生され，続いて統語構造（D 構造や S 構造）に反映される。

3．語彙概念構造の研究分野では，他動詞の語彙概念構造から自動詞の語彙概念構造を反使役化や脱使役化によって派生する考え方と，自動詞の語彙概念構造から他動詞の語彙概念構造を使役化によって派生する考え方がある（詳細は，Levin and Rappaport Hovav (1995)，影山（1996），丸山（1998）等を参照のこと）。しかしながら本論では，学習者が非対格動詞の 2 つの語彙概念構造をどのように関連させて派生させているのかについての順序性は問わないことにし，独立した 2 つの語彙概念構造をエントリーさせていると仮定することにする。

参考文献

Balcom, P. (1997). Why is this happened? Passive morphology and unaccusativity. *Second Language Research, 13*, 1-9.

Hirakawa, M. (1995). L2 acquisition of English unaccusative constructions. *Proceedings of BUCLD, 19*, 291-302.

Hirakawa, M. (1997). On the unaccusative/unergative distinction in SLA. *THE JACET BULLETIN, 28*, 17-27.

Hirakawa, M. (2003). *Unaccusativity in second language Japanese and English*. Tokyo: Hituzi Syobo.

Ju, M. K. (2000). Overpassivization errors by second language learners. *Studies in Second Language Acquisition, 22*, 85-111.

影山太郎 (1996).『動詞意味論－言語と認知の接点－』 東京：くろしお出版.

影山太郎（編）(2001).『日英対照 動詞の意味と構文』 東京：大修館書店.

Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1995). *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge: The MIT Press.

丸山忠雄 (1998).『使役動詞のアナトミー －語彙的使役動詞の語彙概念構造－』 東京：松柏社.

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

Oshita, H. (2000). *What is happened* may not be what appears to be happening: A corpus study of "passive" unaccusatives in L2 English. *Second Language Research, 16*, 293-324.

Oshita, H. (2001). The unaccusative trap in second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition, 23*, 279-304.

Perlmutter, D. M. (1978). Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Proceedings of the Berkeley Linguistics Society, 4*, 157-189.

清水裕子，木村真治，杉野直樹，山川健一，大場浩正，中野美知子. (2003). 「英文法能力標準テストの妥当性・信頼性の検証と新英語文法能力テスト Measure of English Grammar (MEG) 」立命館大学『政策科学』第 10 巻 3 号, 59-68.

Shomura, Y. (1996). Perspectives on pedagogic grammar in English language teaching: A study of the acquisition of ergatives by Japanese learners. *Annual Review of English Learning and Teaching, 1*, 17-35.

Sorace, A. (1993). Incomplete vs. divergent representations of unaccusativity in non-native grammars of Italian. *Second Language Research, 9*, 22-47.

Sorace, A. (1997). Acquiring linking rules and argument structures in a second language. In L. Eubank, L. Selinker, & M. Sharwood Smith (Eds.), *The current state of interlanguage* (pp. 153-175). Amsterdam: John Benjamins.

高見健一，久野暲 (2002). 『日英語の自動詞構文』 東京：研究社.

Yamakawa, K., Sugino, N., Kimura, S., Nakano, M., Ohba, H., & Shimizu, Y. (2003). The development of grammatical competence of Japanese EFL learners: Focusing on unaccusative/unergative verbs. *Annual Review of English Language Education in Japan, 14*, 1-10.

Yip, V. (1994). Grammatical consciousness-raising and learnability. In T. Odlin (Ed.), *Perspectives on pedagogical grammar* (pp. 123-139). Cambridge: Cambridge University Press.

Yip, V. (1995). *Interlanguage and learnability*. Amsterdam: John Benjamins.

Yuan, B. (1999). Acquiring the unaccusative/unergative distinction in a second language: Evidence from English-speaking learners of L2 Chinese. *Linguistics, 37*, 275-296.

Yusa, N. (2003). 'Passive' unaccusatives in L2 acquisition. *Japanese/Korean Linguistics,*

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

11, 246-259.

Zobl, H. (1989). Canonical typological structures and ergativity in English L2 acquisition. In S. M. Gass, & J. Schachter (Eds.), *Linguistic perspectives on second language acquisition* (pp. 203-221). Cambridge: Cambridge University Press.

NII-Electronic Library Service